

第30号  
Vol.10-3  
2014年1月1日

# Dari Kuching

アジア地域福祉と交流の会 (Asia Community Service & Exchange) 広報紙

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-30-9 社会福祉法人嬉泉内

TEL: 03-3426-2323 FAX: 03-3706-7242 HP: <http://ace-jps.com/>

現地事務所: 204, 2nd floor, Methodist Apartment, No. 17, Hose Lane, 96000 Sibul, Sarawak, MALAYSIA.

発行人: 中澤 健 編集人: 中澤 和代 Tel.Fax: +60-84-31-0757 E-mail: [info@acejps.com](mailto:info@acejps.com); [g.kenkn@gmail.com](mailto:g.kenkn@gmail.com)



果物の王様と言われるドリアンを手にした子どもたちの笑顔 撮影者 杉本 正三

くしゃみが思い切り出来る。何と気持ちが良いのだろう。思う存分体をゆすって笑える。何という幸せなことだろう。つくづくそう思う。

新年の挨拶に相応しくない話題とは承知しているが、是非書き留めておきたいので、お許しを。

くしゃみをしたり、咳込んだり、心から笑える…、日常的に何気なくしていることが、こんなにも素晴らしいと感じて感謝すべきことだと知り得たこと自体、感激であった。

明ければ昨年、9月8日未明のこと。ワークキャンプ最終日に雨の暗がり転倒。右胸が痛くて起きあがれず、じっとして助けられた。病院まで車で約1時間。ロングハウスの男3人と妻が運んでくれた。痛かった。長かった!

肋骨3本4ヶ所骨折。そのまま入院。僅か6日間だったが、村の人たち、「ムヒバ」のスタッフや親たちも、片道1時間の道をベッド脇まで来てくれた。痛かったし、話せなかったが、嬉しかった。

自分の不注意やお酒の飲み過ぎで痛い経験をしたが、村の人々の優しさは本当に嬉しかった。が、実際には大いに迷惑をかけた。大げさに言えば死ぬかも知れないと思うほど痛かったが、本当に死ぬ時はもっと迷惑をかけるだろう。瓢箪から駒ではないが、因らずも老後を何処でどう生きるか、考えるきっかけになった。

高齢を自覚して、人の優しさに感謝しながら、自重して注意深く新しい年を生きようと思う。(健)

# ナニア幼稚園のクリスマス



鈴木純子  
(ペナン在住)



お祈りをする子どもたち

こんにちは。ペナンで、ナニア幼稚園をやっています鈴木純子です。月日の経つのは早いもので、園を始めてもう17年になります。今日は、ナニアのクリスマスの会と合わせてお便りしました。

天井ファンがカラカラ回る暑い国マレーシアにも、もうすぐクリスマスがやってきます。ジングルベルの歌とともに街は、クリスマスツリーや華やかなライトで飾られ、プレゼントを買い求め、クリスマスディナーの予約、パーティーの洋服作りときらびやかで忙しい時期、一番物が消費される時期です。

そして、華やかな行事が行われる時は、いつもそれが華々しくなればなるほど、その流れに乗りたいくても乗れない人たちがたくさんいます。金持ちと貧しい人の差があまりにも明らかに浮き出される時期でもあります。

クリスマスがただ単に物を消費するだけのものだったら、子供達が単にお金で買ったプレゼントをもらって喜ぶだけだったら、残念なことです。そんな中、ナニアでは街の華やかなライトを外に見るだけではなく、自分自身の心の中

のおじいさんに、まず一番にプレゼントを持ってってもらったり、助けてもらいたいのは誰?と聞くことにしています。すると、彼らは「津波でおうちを流された子」「お父さんお母さんがいない子」「けがをした子」「病気のおじいちゃんおばあちゃん」などと答えてくれます。そして、しばらくしたら「サンタクロースのおじいさんに、いつもありがとうとお手紙書きたい」「サンタクロースのおじいさんに、ぼくのお手紙を津波に会った子に届けてもらいたい」「ナニアの畑のお野菜をおなかをすかせた子に届けてもらいたい」など出てくるんです。

豊かな国では物質がどんどん豊富になり、子供達までもがそれに慣れ次から次へと物が手に入る。でも、残念ながら物質は子供達の心を豊かにしません。逆に大切なものを奪い取ってしまいます。企業は、営利目的のために次から次

に真の光をい  
だくことがで  
きたら、自分  
以外の人のこ  
とを心から考  
えることがで  
きたらと思い  
クリスマスの  
会を計画しま  
した。

会の一ヶ月  
ぐらい前から  
準備を始める  
のですが、最  
初に子供達に  
サンタクロ

へと新しいおもちゃなど開発するけど、6歳までの子供達に必要なものは、自然界にある木切れ、木の実、石ころ、貝殻や手作りのシンプルなお人形達なのに、と嘆きます。小さい子供達は精神界にとても近い存在であり、自然界のものすべてをあたかも自分達と同じように生きているように感じ話します。「お日様、雲さん、お花さん」と自然に「さん」をつけて呼ぶのもそのためです。そんな子供達の感性に応えるためお祈りはとても大切です。言葉の力によって子供達の魂が豊かなものになっていきます。今年のクリスマスの会で



この子たちが未来をつくる

子供達は「世界中のお友達が幸せになれるように」「病気のお友達が元気になれるように」とお祈りしてくれました。私は、この子供達が大きくなった時、健先生がいつも言われている、みんなが平等に幸せになれる世の中を作って欲しいと祈りました。最後に子供達の詩を御紹介して終わります。

私は、空の星 天の国から  
地球におりてきました  
お友達に会うために  
正しいことを行うために  
みんなを愛するために  
天使さんと歩み  
星のように輝くために

## 2回目のムヒバ訪問 ムヒバに行ってきました

宮崎初恵  
山本 進

私が埼玉県所沢市にある国立秩父学園で職員養成所を担当した初年に養成所に入り、1年そこで暮らして社会人として巣立った人たちが、40年を経て定年を迎え、この度有志が訪れてくれました。職業生活前と後、私としても感慨深いものがありました。その内一人は「ムヒバ」開設当初に一度来てくれましたから今度は2回目。その彼女と今回初回の団長に感想文を綴ってもらいました。(中澤 健)

2013/10/14(月)～21(月)でマレーシア・サワラク州・シブのムヒバを訪問しました。今回のメンバーは国立秩父学園施設職員養成所10期生で、マレーシア在住の中澤健先生を訪ねてクラス会を行いました。

中澤先生は、秩父学園養成所10期生の教官兼寮監でした。中澤先生が日本に帰国した時に、先生を囲んでのクラス会を何度か行っていました。先生のマレーシアでの活動の聞き、何時かは訪ねようと10期生の中で、話し合っていました。今年の春から計画し、9名のメンバーでマレーシア・サワラク州・シブを訪問しました。

私は2008/2/4(月)～2/11(月)に「ACE 第5回 現地視察」に参加してマレーシアを訪問しています。その時は、全国から参加した14名のメンバーで訪問しました。

初めにペナン島を訪問し、早期療育センターと地域生活支援センターを見学しました。両センターの、コ・アイナさん、内海明美さん、他の職員の方達に中澤先生の思いが十分に伝わっているのを感じました。中澤先生が安心して、サワラク州・シブに移った気持ちが理解できた思いでした。

その後は、マレーシア・サワラク州・シブに移動し、ムヒバを訪問しました。ムヒバは、その年の1月に開所したばかりで、職員と利用者の方達は慣れていない様子でした。奥の広い部屋に椅子を丸く並べて、利用者の方達とボール投げやダンスをして交流をしました。ムヒバは高台に建物だけでしたが、中澤先生はムヒバの今後について熱く語っていたのが印象的でした。宿泊予定のロングハウスは想像していたより立派な建物で

した。日本の長屋の様な住居を廊下で繋いだ作りは、住民の交流や雨の日利用され機能的だと感じました。ロングハウス横のバワン川では、子供達や女性の方達が楽しそうに水浴びをしていました。ロングハウスの住民の方達の温かいもてなしに感動し、またイバン族の方達は私達とそっくりな顔なので身内の親戚に遊びに来た思いでした。ペナンもムヒバもロングハウスも印象が新鮮で、訪問して良かったと思う視察でした。

2013/10/14(月)～21(月)のマレーシア・サワラク州・シブの5年ぶりの再訪では、ムヒバがすっかり地元根付いているのに感動しました。職員や利用者の方達は、自分の役割をこなしてスムーズに動いていました。各部屋の作業場やホールでの活動も、生活に溶け込んでいる印象を受けました。道・池・畑・小屋作り等を地域住民とワークキャンプの方達とで完成させていました。池には魚が飼育され、ムヒバの裏には鶏が歩き回り、畑にはパイナップルがなり、5年の歳月で立派な施設に変わっていたのに驚きました。

ロングハウスでは今回も温かい

もてなしを受け、イバン族の方達の優しさをより強く感じました。今回、ロングハウスの廊下や外で子供たちの姿をあまり見かけませんでした。聞くところによれば、テレビやゲームを楽しむようになり、廊下での交流は少なくなったとの事でした。いろいろな情報がロングハウスにも入って来て、近代化が進んだ印象を受けました。これから益々近代化されていくのでしょうか、日本の発展してきた道と重なり複雑な気持ちになりました。(宮崎初恵)

ボルネオという、深いジャングルに包まれた一角…、との想像は裏切られ、ムヒバは山の中腹の明るく開けた場所にありました。開けば、開墾から建築、道路や池などの整備まで、たくさんの人々の汗の結晶とのこと。恵まれた作業所で障害のある方たちが、楽しそうに作業をしていました。職員の皆様も暖かい雰囲気醸し出して、いつまでもそこに居たい気持ちになりました。ムヒバで購入した織りものの小物入れを見ると、中澤先生ご夫妻と皆さんの笑顔が浮かんできます。(山本進)



ムヒバのメンバーと一緒に

## ラジャン川を奥地へ・笑顔に出会う

中澤 和代

さあ！トイボート実践の続きです。と言いつつ…、小さいボートにおもちゃを積んで、奥地の機会に恵まれていない子どもたちを訪ねるのは、せいぜい1ヶ月に1度。障害をもつ子どもに会えるのは、2人か3人である。合理化され、便利さを追求する日本社会の感覚だと効率は最高に悪いとも言える。

前号で私は、「カピットの魅力と“Rajang Toy Boat Project”のミッションに心が躍る」と書いた。反面、悩みも多い。☆これ程、チームの労力とボートなどの借り上げ料金を使っての実践が今後にどう繋がるのかという不安。☆効率無視で、奥地に住む少数の、今、生きて、外に出る方法もない子どもたちに焦点を当て、その子の笑顔を見ることが単なる自己満足にはならないか等。

10月9日、ベナンACSのアイナさん、今はサバに移った明美さん、KLのランリーさんの3人が一緒にこのプロジェクトに参加してくれた。他にコーディネーターのアントニーさんとカピットPKKのビーエンさん、それに私たちとボートドライバーの9人でライフジャケットを身に付け、ボートに乗り込んだ。今回、会う予定の子どもは目が見えないと聞いていたので、前日の夜、みんなで、きれいな音の出るもの、ソフトな手触りのおもちゃ(今回、アイナさんが心づくしのおもちゃを寄贈してくださった)を選んだ。ラジャン川からバレ川という支流に入り45分ぐらい進んだところでボートを降り、おもちゃとロングハウスに持ち込む飲料、食料などを手分けして担ぎ坂道を登る。今回は比較的、短時間で目的地に着いた。すぐにアレキサンダーという16歳の少年の部屋に入って驚いた。

彼は、手、足、体がすんなり見えない程、それらを互いに絡め、まーく寝転がって目をつむっていたのである。呆然と立ちすくむ私であったが、ビーエンさんが素早く、彼の口に甘いものを含ませ彼の手足をゆっくりほぐした。ちょっと手を離すと彼の手足は元通りになる。そんなところにアイナさん、明美さんも協力、少しずつ

工夫しながら両手を取ると、彼はゆっくり立ち上がった。両手を支えられ、周囲の歓声に答えるようにしばらく少年は歩いたが、そのうちに母親が差し出した車椅子に座った。私は、まず、彼自身の手足で音の出るおもちゃを刺激することを試みた。目はつむっているものの、刺激によってもたらされる心地よいリズムを感じていることは彼の動きから察知できた。そうするうちに少年の顔には自然な笑顔が浮かんだ。そう、それは必ずしも聞こえる音のためばかりではない。歩くこと、音を聞くこと、彼を中心にしてみんなが気持ちを一つにしていることが彼に伝わったのではないだろうか…。少年の父は、現金収入を求めて出稼ぎに、母は買い物籠のようなものを編んで生計を立てているという。夫と私は3つの作品を購入し、そのロングハウスを辞した。結局、総勢9人で一日がかり。

11月は、私たちが所用のため、帰国するので、この実践が1ヶ月空くことになると思っていたら、ACSの移動おもちゃ図書館“JOM”をやっているシンディさんとシブのアガベセンター(RCSの事務局長のチェンさんの施設)のスタッフ、キウエイさんが11月を引き受けてくれ、コーディネーターの助力で実践に至った。実施できたことは、もちろん嬉しいが、こうして活動が広がって行くことがもっと嬉しい。夫は常に言う。「今、自分たちが出来ることはほんの少しだけれど、これを続けることにより、どんな奥地でも、そこで今、生きている少数の障害児者を見過ごさないという考え方が、やがては、活動として、地元に着することこそ我々のねらいである」と…。

12月、日本から読売光と愛の事業団の杉本さん、ACE副理事長の山村さん、コーディネーターのアントニーさん、地元PKK Kapitのビーエンさん、地元州立病院の看護師イビエンさん、私たちの7人、そして、今回は特別に助成団体・国際ボランティア貯金から派遣された坪井さんも一緒にボートドライバー3人、助手3人、さらに小さいボート3艘に分れて乗り込んだ。

小さいボートにした理由は、さらに奥地の細い支流に行くためである。約2時間、さながらボルネオ辺境の旅の態様で、片方は流れの速い濁流、反対側はボートの底を擦る浅さ。時には、岸辺への直撃をさけるため櫂で岸からボートを離し、さらには、手引きの船旅。私でさえ、ボートに掴まっているだけで精一杯。とても障害のある子どもには危険な旅であることがわかる。街に病院や施設があったとしても、行けないのは当然…。

着いた先には、話せない・歩けない、しかし、こちらの意思が理解できる7歳の女の子がいて、可愛い笑顔を見せてくれた。

坪井さんと一緒に地元福祉局を訪ねたが、ここの辺地故の悩み多き局長の話、そして、彼がこの活動を共に実践する州立病院の院長や看護師へのインタビューを試みた感想はどうだっただろう。悩みつつ…、ではあるが、何がどうであれ、一人を見過ごす社会より、何とか、つなげる動きを続けたいと再確認できた船旅であった。



お母さんのおなかの中で人はこんな風にいるのではないだろうか？



16才の少年  
7才の女児



チームの意思力と本人の力を信じる日々

## ACSだより サバ在住 内海 明美

### ☆☆☆私のカンボン、Betong村☆☆☆



完成した現在

Pulau Betong 村にあるACS 地域生活支援センター、つぶやくだけでメンバーと職員の笑顔が自然に思い出され胸いっぱい暖かい空気が流れ、訪ねていける時は、なぜか、心が弾む。私のカンボン(故郷)です。2013年8月末、琉球大学の教授方のACS訪問を受けて急遽、臨時通訳として同行する機会を得ました。空港近くの新しく舗装された道路を通過し、毎日朝食のため、立ち寄った中華系の

コーヒー店もそのまま営業中、おじさんたちも同じ顔ぶれで、甘いティーを飲んでいる。それから両側に立ち並ぶマレー風2階家を過ぎ赤い屋根が見えてきた。そうACS地域支援センターです! あらっ!



工事中

少し様子が変わった、なんか整然としすぎているなど感じましたが、門を通ると右側には、車庫にも屋根が付いています、またローラー装着のためイベントの時には移動可能なのです。左



この場所に

側には、ブーゲンビリアが重く咲いていたのが取り去られ陶芸室となりました。ぐるりと裏側に回るとマンゴーの木が実をつけています、自立生活準備ホームの囲いには、緑のつたが這い回りパッションフルーツの実がたくさんです。ニヤニヤ笑いながら、手を差し伸べてくれるメンバーたち、歯が欠けた笑顔、少し老けたかなと思われる顔、以前と同じ、がやがや、にぎにぎと挨拶を交わします。もう見えなくなった顔もあります。職員たちも、相変わらずの笑顔です。時間の流れは止められません、ACS 地域生活支援センターの変化に、メンバーの作業時の使いやすさ、みんなの暮らしや健康への考えが伝わってきます。そこにいる人たちが常に主体です。ACSの理念が具現されています。少しの誇りを持って「ここが私のカンボンです」と、私は、訪問者に告げているのです。



## RCSはいま 中澤 和代

### ☆☆☆ 作品制作室の風景☆☆☆

今、特に活気づいているのが、Muhhibahセンターの作品づくり。その部屋では、日常的に2台あるミシンの1台をスタッフが使い、他の1台をシマという女性メンバーが専用に使っていた。私たちの意向としては、特定の個人が何かを作るだけではなく、多くのメンバーが体験・習得できるサポートをスタッフに期待していた。何故なら、作品制作部門には、ミシン2人とアイロンかけの男性メンバー1人、日常的に3人というのが実態で、となりの織物部門には15人ほどもいて、リーダー的なメンバーも育ち、楽しく役割を果たしていることを思えば、この部屋は私たちにとって課題だった。しかし最近になり、急にこの部屋の人が増えた。余り布で小さな造花をつくる人、染糸を使ってリリアン

編みの器具で網ひもをつくる人。この中に、男性メンバーも数人入り、喜々としてものを創りはじめている。考えてみれば、リリアン編みの小さな器具は、メンバーの誰かが意欲を感じてくれれば、と2年も前に日本から買って来たものである。当時、私はある女性メンバー2人にそれを教え、彼女たちは、それに取り組むことに興味を持ってはいたはずだった。が、いつのまにか引き出しの奥深くにしまわれていた。私が常時いるわけではないので仕方がない。スタッフの興味を引かないものを押しつけるわけにも行かず、工夫の余地はなかったかと自分の思いこみを反省したものだ。2年余り過ぎた今、小さな器具が陽の目を見、メンバーの取り組む姿、作品に生かされる時を迎えた。ペナンに行っ

た時ももらった布の可愛い手作り造花もいつのまにか、メンバーの手により、Muhhibahの花として咲くようになった。織物の大きなバッグの片面をキャンバスに、網ひもやフリンジ、手作りの花々がメルヘンを語りかけてくれる昨今である。

長い間ご心配をおかけし、懸案だった入り口の崩れた道路、100mは11月に土木局の好意でアスファルトが敷かれた。雨期の前に補修がかない、一同ほっとしている。



真剣な表情で編み物をつくる男性メンバー

# 「やらんやらん ちんちん かわん」(30回)

## 馬なの？ 鮫なの？

さて、今年の干支の馬にちなんだお話を。

サラワクにはもともと住んでいる馬は居ません。残念ながら。多分乗馬用には居るのでしょうが、少なくとも僕が住んでいた周りでは見たことがありません…、と言うことでこの話も終了～と言う訳にもいきません。

陸地には馬は居ませんが、実は海の中に居るのです。以前に紹介したタツノオトシゴは英語では「Seahorse」=海の馬ですし、近い仲間にはベガサスの名前がついているものもいますし、ウマツラハギなんて美味しい魚もいますね。

その中でも自慢、いやいや、紹介したいのが、ヨコシマサワラと言う魚です。

日本では春を告げる魚と言う事で「鱈」と言う字を書く魚の仲間、大きいものでは2m近くになり、英語ではSpanish mackerelと

## 上杉 誠

言います。どこが馬と関係があるの…？と言う感じですが、これが中国名で「馬鮫魚」。馬みたいに顔が長くて、鮫みたいな姿をした魚と言った感じの意味でしょう。

確かに、日本で食べられる鱈よりも顔が長くて、鮫のようにシャープな体つきですね。馬と鮫を混ぜてしまう中華センスはすごい感性ですよ。まあ、日本語も2種類の魚が混じってますが…。

このカマスサワラ、ボルネオでも5本の指に入る美味しい魚と言われています。引き締まった白身で旨味もたっぷり、焼いてよし、揚げてよし、マレーシア風カレーなんて、もうたまりません！もちろん日本人ならお刺身で行きたいところですが、サラワクではサラワク風マリネの「ウマイ」でいただくのが通ってもんですね。

僕の暮らしていた離れ小島ではおかずを確保するために夕方にな



ヨコシマサワラ

ると釣りをします。その時に釣れると一番うれしいのが、このヨコシマサワラでした。なんせ、大きいので3日分の食料にはなりますし、何と言っても美味しさが他の魚とは違います。この魚が釣れた日にはスタッフみんなで大喜び。嬉しさも美味しさも分け合ったものです。その中でも一番の大物が写真の魚です。なんだか、自慢みたいな最後になってしまいましたね(笑) 市場でも売っている魚ですので、ボルネオに来たら味わってみてくださいね。

Jalan jalan cari kawan はマレー語で友達を探しに行こうの意味です。

## 2014 ACE総会の開催予定

今年の総会を、6月7日(土)に開催することになりました。例年より少し時期が早いので、お間違えのないようお願いします。会場は例年通り、地下鉄の表参道駅から、徒歩5分の南青山会館です。時間等もおおむね例年通りですが、詳細はまだ決まっています。3月末発行予定の「ACEだより」でももう少し詳しくお知らせします。今から予定して下さい、是非ともご出席下さいませようお願い致します。

## ACEに入会のお誘い

### \*この会(ACE)は…?

アジア地域福祉と交流の会(ACE)は、人種、宗教、性別、障害の有無などにとらわれず、「お互いの違いを認めて支え合う」という考えを基本に、アジア地域を視野に活動しているNPO法人です。

具体的な活動としては、主にマレーシアで知的障害児(者)の福祉活動をしているペナンのACSとサラワクのRCSの活動を支援しています。

### \*賛助会員種別と年会費

一般会員 (1万円)	特別会員 (3万円)
学生会員 (5千円)	団体会員 (5万円)
終身会員 (納入1回限り 15万円)	
任意会費会員 (年会費2000円以上)	

### \*ご入会の方法

ホームページ、E-mail、あるいはFaxか郵便で事務局にご連絡ください。アドレス、URL、Fax番号は、1ページ紙名の下にあります。

## 編集後記

・Dari Kuchingが30号を迎えました。一年に3回の発行ですので、これで10年の歳月を経過したことになります。長いようで、短い10年だったという感想です。読者のみな様、書き手の方々、そして助成して下さっている日本社会福祉弘済会様、何号まで継続できるのか、今後とも共に歩んでくださることをお願いして、年頭のご挨拶といたします。(Kazuyo)

・2面に書いて下さった純子さん。シュタイナーを学び、その影響を受けながら独自の幼稚園をペナンでつくり育てて来られました。もう17年になるとのこと。日々の実践から生まれた純子さんの文章に心洗われます。清い心と力強いパワーで、2014年が良い年でありますように。昨年9月、私たちは表記の住所に転居しました。未だに郵便物が古い住所に届きます。どうぞ新しい住所に登録替えをお願いします。(Ken)